パロディ一期一会

稗田東夷人

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
パロディ一期一会

【Ｎコード】
Ｎ４２２０Ａ

【作者名】
稗田東夷人

【あらすじ】
パロディーです。埒もない変態行為を格調高く、真面目に、上品にやったらこうなるんではないかと。

（前書き）

真剣に読むと疲れるよ。

丁寧に打ち水された苔蒸した庭の飛び石を踏んで、小路の角を曲がると、竹林が開け、日の光の中に一庵の茶室があった。茶室に至る手前の踏み石の上にセーラー服の少女が佇んでいた。セーラー服の白さが日の光にてらされて映えた少女が私の姿を認めると、丁寧な会釈をした。少女の足元の石は、小さく段差がついていて、少女の白い三つ折りソックスとよく磨かれたローファーに固められた足は下の段に乗っている。上客を招く時の作法である。

「どうぞ。」頭を垂れたまま少女は澄んだ声で簡潔に言うと、私をにじり戸に先導した。濃紺のセーラー襟のあたりで、つややかな黒髪のお下げが二本下がった小柄な後姿であった。にじり戸が引かれ、ます私か室内に入った。草履を揃えようと再び顔を出すと、少女は作法通りに最初の所作を行っているところだった。私はこれも作法通り、丁寧に草履を揃えながら、少女のもてなしの心栄えを愛でるのである。少女は折皺一つない膝までのスカートを僅かにたくし上げて両手を差し入れるとスルスルとショーツを下げた。足首まで下げると、今度は靴底の土をつけないように、慎重に両足からそれを抜きとった。一連の動きにそつがなく、低いアングルから見る、私に白い太股をちらりと見せる心配りもあった。少女がショーツを軽くたたみ、スカートの左ポケットに納めるのを見届けてから、室内に着座した。待つほどもなく、ますにじり戸から純白の三つ折りソックスに包まれた足が入ってきた。少女は必要以上に脚を開かないように慎重に尻をずらしなから入ってきた。軟らかそうな毛が控え目に生えた恥丘と、小陰唇のはみ出していない清楚な女性自身が目に入った。

「どうぞ、お気遣いなく、早々にご着座ください。」私が言うと、少女は足を大きく開き、尻を持ち上げてせっせと体を室内に引き入れた。私の言った事は肛門も見たいから遠慮しないでもっと楽に早く入ってきなさいと言う意思表示であった。客の意に反して、肛門までは見せない慎みもまた作法である。時間にすれば数秒であったが少女のスミレ色の肛門を目に焼き付けることができた。少女は多

少乱れた着衣を手早く整えると、風炉を挟んで私の向かいに横向きに着座した。

「ようこそ、お出でくださいました。」「お招き、ありがとう存じます。」私達はお互いに礼して挨拶の口上を済ませた。部屋の中に甘酸っぱいいい香りが漂っている。この少女が半月程も前から、日に一度はこの二畳一間の狭い部屋で自慰を行い、染みつかせた香りである。行き届いた配慮に満足して、私は瞑目して何度か深く呼吸した。目を開けると少女は先ほど脱いだショーツを丁寧に畳み直していた、少女は細く白い指で、表が上にくるようにそっと菓子盆にそれを置いた。少女は僅かに膝をにじらせて、私の前にショーツの乗った菓子盆を差し出した。黒漆の盆の上に純白の木綿のショーツが乗っている。清潔な感じのする、よれてはいないショーツであったが、正面に付いている緑の小さなリボンが若干、退色して生地も洗濯の痕が観てとれた。敢えて新品を供せず、生活感のある日頃の下着を供するのも心栄えである。もちろん、度が過ぎて、ゴムの伸びた物などを出しては仕方がない。少女の配慮は完璧で日頃の清潔好きを感じさせる清楚さと、生々しい生活感のバランスが完璧なショーツであった。

「この銘をお聞かせくださいませんか？」軽く畳みに軽く手を付いて、ショーツを愛でていた私は軽く視線を上げて聞いた。

「若草でございます。」少女が顔を私に向けて、軽く腰を折って答えた。私は懐紙を数枚引き出すと、二つ折りにしてショーツを載せた。菓子盆をそっと横へ押しやってから、畳んだ状態を崩さないようにそっと持ち上げて鼻に近づけた。作法通り端正に、しかしそれでいてふわりと軟らかく畳んであった。スズランの香りの洗剤と少女が日頃使っている石鹸と、そして甘酸っぱい汗の香りとが調和して思わず相好が緩んだ。

「流石ですな。あの仁の娘さんでなければその歳でこうは行きません。」世辞ではなしに私は感嘆して言った。

「いいえ、母から多少仕込まれた程度でして、お家元様をお招きでき

るようなものではありません。」少女は身を縮めて恐縮した。小柄な体が一掃小さく見え，一瞬、少女が年齢以上にあどけない印象となった。私は懐紙の上のショーツを静かに開き両手に取って股布を愛でた。股布は僅かに体液と汗で湿り、裏返せばほんのりと染まった沁みがあった。その沁みの中に、細く柔らかな縮れた体毛が一本張り付いていた。これは偶然に付いた物ではない。掃き清めた枯れ山水の上でそっと庭木をゆすり、落ち葉を数枚散らせるのと同じ、作為を巧みに隠した心配りなのである。予め少女は自分の股間から美しい一本を選び、抜き取った上でそっと仕込んでおいたのである．私はとっとその可憐な体毛をつまみ上げ、数奇屋風の窓から差し込む光にかざし、しばらく愛でた後、口に含んだ。数奇屋風の丸窓は障子ではなく、義山を用いて、茶室の中は通常よりやや明るい。窓から直接光がさす、少女のあたりは特に白く浮かび上がるようであり、白い長袖のセーラー服が暗い土壁に囲まれた室内で一際鮮やかであった。

「どうぞ遠慮なくご賞玩ください。」少女は作法通り声をかけた。

「いえ、思い出草に持ち帰ろうと存じます。」これも作法通りの口上を述べて、私は静かにショーツをたたみなおし、懐紙に包んで袖に入れた。少女は空の茶釜を火の入った風炉の上に据えた。しばらく茶釜が温められて鳴る音を聞きながらその温度を見きわめていたが、おもむろにセーラー服の紺のスカーフを解き、何度かたたんで長方形にして手にとると、すっと立ち上がって茶碗を棚から取り出した。少女は再び着座して、たたんだスカーフの上に茶碗を載せ膝の前に静かに置いた。既にかなりの時間を正座して過ごしていたが、少女の動作に全くぎこちない所はなかった。当人は謙遜しているが、母親から相当に厳しく仕込まれたに違いなかった。少女はいったん火にかかって熱せられている茶釜の方に視線を向けると、背筋のばし二呼吸ほどの間、精神を集中するように瞑目した。少女が正座した姿勢からスカートをスルスルとたくし上げ、左膝を静かに立てた。つく膝の左右は逆であるが、屋外で方膝を付いて拝礼するかつての

武家の作法とよく似た姿勢である。肩膝をついてスカートの僅かな衣擦れの音がするだけの静かで美しい身のこなしだった。私の座る位置からは、少女の白いうち股と、これもまた可憐な女性自身が見てとれた。少女は左手を股間に添えると、そっと性器を剥き広げた。明り取りの窓から差し込む日光に照らされて、色素の沈着の見られない可憐な桃色の粘膜が目にしみるほど鮮烈であった。少女はその姿勢のまま、右手で灰釉の沓茶碗を取り上げ、慎重に位置を確かめるように、足の間に入れた。少女はその姿勢のまま静かに目を閉じた。下唇を軽く噛むと、少女の体が一瞬僅かに強張って、剥き広げた桃色の器官から小水が迸って、少女の右手の茶碗に注いだ。ちょろちょろと可憐な水音が狭い茶室に響いたが、その音はすぐに止まった。茶碗に柄杓二杯ばかり溜まったところで、少女が下腹部に力を込めて、放出を止めたからである。尿道の短い女の身でこれをやるにはかなりの練習が必要だが少女は自然にやってみせた。ほのかに上気した頬だけが先ほどの所作に要した精神の集中を物語っていた。見事な所作に見入っていた私は少女の体毛を口に含んだままになっているのをやっと思い出した。私はその体毛を喉に張り付かないように、十分な唾液と一緒にそっと飲み下した。少女は再び膝を揃えて座りなおすと、茶釜の蓋を開け、茶碗の中の小水を中に注ぎ入れた。十分に熱せられた茶釜の底で液体は瞬時に激しく沸騰し、もうもうと湯気を発した。狭い茶室に目眩を覚えるほどの濃厚な芳香が立ちこめた。違い棚の上には薄桃色の塩の結晶が飾られている。これは何度も小水を蒸発させた、茶釜の底一面に厚く塩の結晶が着いたものを剥がし、整形したものである。この日にここで飾られているのだから、少女の小水が結晶したものに間違いない。結晶の塊は子供の拳ほどはある。これだけの大きさだを作るのは毎日稽古をつけても半年はかかるのである。少女の日頃の精進が尋常一様でないことはこれを見てもわかった。少女はもうもうと立ち登る湯気に両手に持った茶碗をかざし、慎重に温めてた。湯気がおさまる頃，少女は十分に熱くなった茶碗を、スカーフを敷いた元の位置に戻し、

手早く茶釜を風炉から下ろすと、蓋を少しずらして蒸気が抜けるように被せた。少女は膝の前に置いた沓茶碗を凝視している。蒸気に当てることでついた水気が茶碗の熱で乾くのを待っていたのである。再び、先ほどと同じように静かに片膝を立てた少女は、膀胱に残っていた残りの小水を注いだ。もちろん、二回に分けてちょうど良い分量になるように、少女はトイレの時間と水分補給を計算していたのである。少女は膀胱を空にした少女の顔に僅かな安堵の表情が浮かんですぐに消えた。少女は下腹部に力を入れて小水を切った。ほんの数的分が迸り、茶碗に落ちた。畳に雫を落とさないためには完全に小水を切らねばならない。尿道が短い上に性器の形状が複雑な女の身では難しいが少女は二度とも完璧にやってのけた。ぴんと背筋を伸ばした少女が茶船を手にとり、茶碗の中の液体を泡立てはじめた。軽やかな茶筅さばきの音がしばらく続き、やがて私の目の前に濃紺のスカーフを折りたたんだものに乗せられた、柔らかな泡をたっぷりと湛えた沓茶碗が差し出された。濃紺のスカーフの上にくすんだ灰釉が厚く流れた沓茶碗が乗り、その中に純白の泡が柔らかに浮かぶ見事な配色であった。双方が会釈して、私は茶碗を取り上げ押し頂くと、胸の前で茶碗を回しながら手に伝わる温もりを愛でた。私は静かに茶碗を口元に運び、小水の香りをゆっくりと吸い込んでからそっと啜った。巧みな茶筅さばきで舌の上に広がる感触は滑らかで、味に角がなく、空気をたっぷり入れたことで香りも立っていた。郷愁をさそうアンモニア臭と少女特有の健康的な甘酸っぱい香りと、強過ぎない心地よい塩味とを堪能して、私は喉を温かい液体が降りてゆくのを感じながら、しばらく瞑目した。私は喫し終えた茶碗をしばらく膝の上で賞玩した。一見して筋の良い品とわかるその茶碗が、使いこまれ、錆びた風合いを醸し出していた。

「このお茶碗はよろしいですな。元々の姿の良さもさることながら、良い風合いが出ております。一流の御仁の手を渡ってきたのでしょう。」膝の上で茶碗を回しながら私は言った。

「織部風の沓茶碗でございますが、銘はございません。本来、お家

元様にお出しできる品ではありませんが、若い頃の母が日頃愛用していた品でございますので。」少女は腰を折って丁寧に茶碗の由来を教えてくれた。私は喫し終えた茶碗をスカーフの上に乗せ、少女の方へ押しやると、すかさず懐紙を一枚抜き取り、腋に添えた。
「よろしければ、お使いください。」懐紙を差し出しながら私が言った。
「おそれいります。」少女は軽く会釈して、懐紙を押し頂いてから、膝を僅かに開き、腰を浮かせ懐紙を尻の側から股間に差し入れた。室内は静寂で、懐紙が尿道口に押し当てられるときの紙に皺が寄る音まではっきりと聞きとれた。
「ありがとうございました。」懐紙を私の膝の前に使い終わった懐紙を押しやって、少女は畳みに軽く手をついて借用の礼を述べた。私も軽く答礼して、懐紙を取り上げた。懐紙の四分割した左上に皺がより、その中央に小さな尿の沁みが合った。私はそっと鼻を近づけて香りを楽しんでから、尿の沁みが中にくるように懐紙を折りたたみ、袖に納めた。少女が紙の中央を敢えて使わなかったのは、折りたたんだ時に沁みの位置が折り目と重ならないための配慮であった。私は持ち帰った後のこの懐紙を軸装しようと決めていた。少女の慎ましくも凛とした人となりが良く現れた、趣のある景色だったからである。少女は静静と道具をしまい始めた。その凛とした所作を愛でていた私の視線がふと床の間の掛け軸に移ったとき、そこに見覚えのある落款を見つけた。四半畳ほどの画面に、幾つかの沁みと滴った液体が何かに擦れた後が散らばったものである。
「あの落款はお母上のものですね。」胸ポケットから取り出した純白のハンカチで茶碗を拭い、棚に戻した少女が静かな衣擦れの音を立てて着座するのを見届けてから、私は切り出した。
「はい、母が初夜に使った紙子を自ら軸装いたしました。滴った破瓜の血とそれが尻の下で擦れたものでございます。当家の所蔵でお家元様にお見せできるのはこれくらいでございまして。」少女が私の方に向き直って、手をついて答えた。

「書き添えてある文字は『偶成』ですね。通し稽古の前には必ず唱和したのを覚えています。」かつての愛弟子の姿がそこにあるようで、懐かしさが込み上げ、私はさらに続けた。
「はい、『池塘春草』と申します。」少女が慎ましく、それでいて明瞭に答えた。動作と声の端々に凛とした涼やかさがあった。破瓜の出血が多かったのだろうか、点々と散らばる黒い血の後は大粒であった。画面の上部をほぼ左右に横切るように、滴った血が擦れた跡が残っていた。相当に苦しい破瓜に身を悶えつつも堪える様が伝わってくる景色であった。
「お見事です。凛として健気なお母上のお人柄がよく景色に現れています。」私が言うと、少女の顔が感激で赤く染まった。
「この度、お母上には新設の海外青年部長を引き受けて頂きました。私が強く押したのはお母上の他には、この大任は任せられなかったのです。単身赴任ですから貴方には寂しい思いをさせてしまうことになります。その私がこのような心づくしのもてなしを受け、なにやら申し分けないような心地です。」私は少女に向かって手をついて言った。
「いえ、お家の大事でございますので。」同じく手をついた姿勢の少女が凛と答えた。家元から慰撫の言葉をかけられた感激で目じりに光るものがあった。
「別室に床を用意いたします。鳴り物でお知らせいたしますので、ご足労願えますでしょうか。」日頃の精神修養の成果で、早くも平静を取り戻して、少女が言った。この日の高い時間帯に床を用意するのは、もちろん眠っていけとの意味ではない。
「いたみいります。」私が一言かけると、少女は静かな衣擦れの音を残して庭に去った。室内にはまだ、先ほどの点前の余韻が残っている。あまずっぱい芳香が漂う室内に端座して私は待った。ほの暗い茶室の中で、床柱にかかった花生けに小枝に咲いた山桜が映えていた。薄桃色の可憐な花を愛でる私の耳朶に晩春の凱風が竹林を渡る音が届いた。